

# 唐節愍太子墓壁画の鳳凰図について

網 干 善 教

唐第4代中宗顕の第3子であり皇太子であった節愍太子重俊墓が発掘され、その墓室に描かれていた壁画の全容が陝西省考古研究所編『陝西新出土唐墓壁画』（以下『新出土唐墓壁画』と略称）と題し1998年11月付で刊行された<sup>(1)</sup>。

筆者は1972年3月、奈良県明日香村所在の高松塚古墳で極彩色の壁画を検出、描かれた四神図のうち東壁中央青龍図の頸部に鮮やかな色彩で×文様の頸飾のあることに注目し、東アジアにおける類例を聚成、若干の考察を行った<sup>(2)</sup>。その後も折りにふれ資料の蒐集を行ってきたが、今回刊行された『新出土唐墓壁画』のうちの節愍太子墓内の鳳凰文に、同様の文様があることが分かり、これについて紹介すると共に所見を述べておきたい。

節愍太子は壁画で有名な乾陵陪塚の懿徳太子

重潤の弟であり、父中宗の兄は同じ壁画墓と知られている章懐太子賢であることは知られている。

また、唐高宗と則天武后の間に生れた父中宗、その弟は五代睿宗旦であり、その子の第六代玄宗隆賢とは従兄弟にあたる。詳しい系譜は省略するとして、節愍太子は中宗の皇太子という地位にあった。

その頃唐王朝では権力闘争が繰り返されており、なかでも武三思は、中宗の娘である安楽公主と謀り、公主を皇太女とするために節愍太子を失脚させようとした。それを知った節愍太子は武三思父子ら十数人を斬ったが、結局反逆にあい敗死した。第五代睿宗旦は節愍太子は無罪であることを明らかにし、景雲元年（710）定陵の陪葬墓とした。



図一 飛風図

発掘された節愍太子墓は陝西省富平県宮里郷南陵村に所在する。刊行された『新出土唐墓壁画』には次の如く概要を記述している。

墳丘の外形は覆斗形を呈しており、高さ約26m、東西の長さは約120m、南北の幅は約150m、陵園には門闕、角樓が設けられている。墓の前には石獅子、石人などが立てられている。

地下の部分の全長は約54m、長くて、傾斜した坂のような甬道と3箇所の過洞、4箇所の天井をもつ双室磚墓である。主要な副葬品には紛彩俑、三彩器、太子の身分を表す玉冊などがある。

本来、墓道から墓室まで、壁面全体に壁画が描かれていたが、現に残存するのは、山石風景、戟を持つ儀衛、闕樓、馬球を打つ場面の一部と、東宮府吏、内宮、侍従などの人物画と甬道の卷頂に描かれた鶴、鳳凰、孔雀などである。

節愍太子墓は、章懐、懿徳太子墓が発見されて以来の、壁画が最も精彩で、保存状態が

よいものである。

この『新出土唐墓壁画』には数々の重要な資料が掲載されているが、そのうち頸部に×文様の装飾のある鳳凰図は2箇所にみられる。

本墓には前甬道に翔鶴図、飛鳳図、飛鳳図、孔雀図、后甬道卷頂飛鳳図、飛鳳図の6箇所に鳥文図が描かれている。このうち前甬道の飛鳳図と飛鳳図をみると、飛鳳図の方は頸部の位置に剝落があり不明であるが、飛鳳図の方は鮮明に残存する。因みに「鳳凰」の「鳳」は雄の鳥であり、「凰」は雌の鳥を表す。したがって「鳳凰」は雌雄対称となる。

さて、123図に挙げられ飛鳳図は前甬道卷頂の図である。この鳳文について概略次のような説明がある。

鳳凰図の東壁の鳳であり高さ90cm、幅145cm、頭は巨大な龍頭に描かれ、鷹のような鋭い目で睨み、口は開いており、みるからに猛威である。

鳥の華麗さと龍の氣勢を兼ねている。鳳凰は唐代の墳墓の壁画に常にみるところであるが、



図一2 后甬道卷顶飞鳳

雄と雌に分け、精細、伝神のように製作されたのは実に稀なことである。

頸飾×文様をみるのはこの鳳であるが、当然対称をなす雌の鳳にも描かれていたことは確かであろう。

同墓にはもう1個所鳳凰図が描かれている。それは第125図の後甬道巻頂鳳凰図の西側に描かれた鳳である。説明によると後甬道の壁画は殆ど剥落していたが、墓室と接続しているところで一幅が残存している。そのうち鳳は鳥のような頭上に「靈芝冠」を戴き、頭側に長い羽根を後向きに浮かべ、蛇のような頭に「綉球」が繋がれ、翼を拡げ、足を収めて飛んでいる様子で表現されている。

前甬道の鳳の位置は東壁にあることから西側にある本例は雌であると推測できるが、製作技法はやや簡略、粗末で、線条を描く能力も遜色するので、両者は同一人物により描かれたものではないだろう。

この後甬道の雌の図は頸部にあたるところに剥落があつて定かでないが、ここでも雄雌共に頸部に×文様が描かれていたと思われる。

この前甬道の鳳、後甬道の鳳、共にS字状に

曲った頸部に、高松塚古墳東壁や奈良薬師寺本尊台座の東面青龍図にみられるような×文様が描かれている。因みに×文様は青龍図だけにあるのではなく、かつて指摘したように<sup>12)</sup>四神図壁画のほか、唐代文物の装飾図にも多くみられるものである。

四神図をはじめ多くの文物にみる×文様の頸部装飾という特殊な文様は、現在の知見による限り、中国唐朝の都、西安市周辺、高句麗の都集安、平壤周辺の壁画墓及び日本古代の宮都飛鳥、平城薬師寺、正倉院宝物などにあつて、時代的に唐文化と白鳳、天平文化を結ぶ事象であるともいえる。

その頸飾は3種類に分類できることを示しておいた。唐節愍太子墓壁画の鳳凰文頸部装飾文はこのうちの第1類であるといえる。

節愍太子墓の鳳凰は飛翔する雄壮な姿を描いている。これはそれまでの動物文の概して静止する姿態とは異なるものと思える。

さらに、×文様の頸飾はその類例からみて年代的には唐代の象徴的な文様であるとも考えられる。そして対称的な双鳥図の場合、本書でも指摘されている如く、東側は雄である鳳、西側は雌である鳳と描き分けられていることも注意してよいだろう。

次に後甬道飛鳳図の頭頂に靈芝冠がみられるが、この類例は町田章氏が挙げられる墓門の朱雀図、『海内外唐代銀器萃編』の双鳳銜緩直腹盤、西安市南郊何家村出土の孔雀紋盃頂銀箱紋飾の一对の鳥文や、正倉院宝物紫地鳳形錦御軾の鳥文などにもある。また頸部に火焰形の装飾もみられる。

節愍太子墓は710年の築墓であるから、わが国では藤原京から平城遷都の年に相当することを考えておくことが肝要である。

なお『新出土唐墓壁画』を本学大学院文学研究科博士課程後期課程に在学中の留学生汪勃君より提供をうけた。記して謝意を表す。

註(1) 陝西省考古研究所編『陝西新出土唐墓壁画』重慶出版社、1998年(使用した図は本書より転載した。)

(2) 網干善教「四神図の頸部装飾とその類型」『関西大学博物館紀要』第4号、1998。『高松塚古墳の研究』所輯、1999年



上 節愍太子墓全貌 下 節愍太子墓发掘现场